

気象記念日について

平成14年6月1日(土)は、第127回気象記念日です。気象庁は6月3日(月)に別紙のとおり記念式典等を行います。

気象記念日は、明治8(1875)年6月1日に東京で気象と地震の観測が開始されたことから、昭和17年に制定されました。以下に、気象業務の歴史の概要を述べます。

1 御雇外人からの気象観測の建議

明治政府は、明治4(1871)年7月工部省に測量司を置き、東京府下の三角測量を始めましたが、測量師長はイギリス人のマクビーン(C.A.McVean: 明治元年に灯台建設のため来日、明治4年に工部省測量司に移る)で、測量助手はイギリス人ジョイナー(H.B.Joyner: 明治3年に京浜間鉄道布設のために来日、明治4年に工部省測量司に移る)でした。このジョイナーが気象観測の必要性を建議し、明治6年5月工部省測量司は気象台を設けることを決めて、ロンドン気象台長に気象器械のあっせんを依頼しました。マクビーン自身も測量器械購入と測量技師招へいのため、測量正河野通信に随行して渡英しました。マクビーンはフランスからイギリスに帰化したシャーボー(H.Scharbau)の日本招へいに成功し、そのシャーボーに気象器械の調達を依頼しました。シャーボーは15か月間にわたりイギリスで各種器械の購入にあたり、明治7年7月それらの器械を携えて来日しました。シャーボーは「日本は地震が多いと聞いたが、測点が移動しては困る。日本で測量をするにはまず地震観測が必要だ。」と考え、イタリア製の地震計を気象器械とともに持参しました。

2 気象器械・地震計の据付けと観測の開始

明治8(1875)年5月これらの器械の据付けが完了しました。場所は、内務省地理寮構内(現在の東京都港区虎ノ門2-10ホテルオークラのあたり)です。そして、同年6月から観測が開始されました。気象記念日はこれを記念したものです。当初は、御雇外人ジョイナーが一人で担当して1日3回の気象観測を行い、地震があれば土蔵の中の地震計まで飛んで行きました。間もなく、ジョイナーの要請により、同年9月から正戸豹之助(地上・山岳観測、通信等多方面で事業整備に尽力、のち中央気象台統計課長)、下野信之(のち大阪測候所長)、中條信倫(馬場と改姓、のち商船学校教授)、大塚信豊(地震・火山業務を経て、長崎測候所長)、武林貞次郎(のち長崎測候

所長)らがジョイナーの伝習生となり、徐々に観測に加わりました。

その後明治 10 年 6 月には、ジョイナーの満期解雇のあとをうけて正戸豹之助が観測主任になりました。

なお、明治 16 年 3 月 1 日に東京気象台で初めて天気図を作成し毎日の印刷配布が、さらに翌 17 年 6 月 1 日には毎日 3 回の全国の天気予報の発表が開始されています。

3 組織の変遷

気象観測を計画した工部省測量司は、明治 7 年 1 月に内務省に移管され同年 8 月には内務省地理寮量地課と改称されています。日本の気象事業は、工部省によって計画され、内務省によって実現されたこととなります。

明治 8 年 6 月 1 日、内務省地理寮量地課は東京気象台を設立し、中央気象台の基礎を作りました。

その後、気象事業は明治 28 (1895) 年 4 月に内務省から文部省に移され、昭和 18 (1943) 年 11 月に運輸通信省、昭和 20 (1945) 年 5 月に運輸通信省が運輸省と逓信省に分かれたとき、運輸省所管となりました。

東京気象台は、明治 20 (1887) 年 1 月に中央気象台と改称、昭和 31 (1956) 年 7 月に気象庁となりました。平成 13 年 1 月の中央省庁等の再編に伴い、気象庁は国土交通省の外局として新たに業務を実施しております。

第127回気象記念日行事予定表

- 1 実施日 平成14年6月3日(月)

- 2 式典次第 11時00分～11時45分(講堂)

開式の辞	11:00～11:01
国歌斉唱	11:01～11:03
気象庁長官式辞	11:03～11:08
国土交通大臣あいさつ	11:08～11:13
国土交通大臣表彰	11:13～11:18
気象庁長官表彰	11:18～11:28
永年勤続表彰対象者紹介及びお祝いの言葉	11:28～11:38
来賓祝辞	11:38～11:42
被表彰者総代答辞	11:42～11:45
閉式の辞	

- 3 記念写真撮影 12時00分～12時15分(講堂)
被表彰(対象)者及び同伴者

- 4 昼食会 12時15分～12時45分(推薦部局または大会議室)
被表彰(対象)者及び同伴者

- 5 祝賀会 18時00分～19時00分(講堂)